

増上寺徳川家霊廟の風景（５）

北霊廟の唐金灯籠

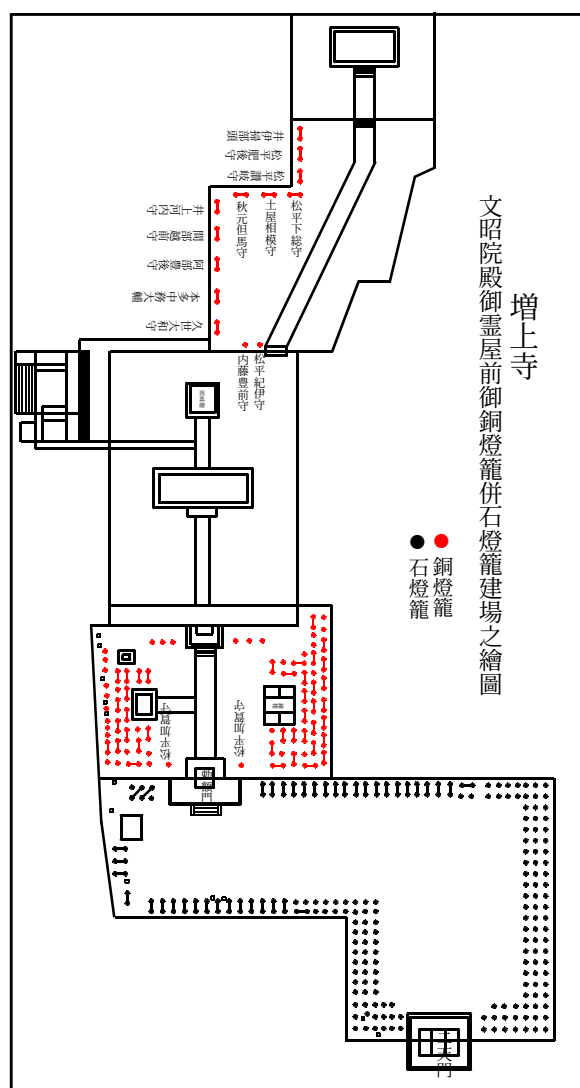


図1 文昭院殿御霊屋前御銅燈籠併石燈籠建場之繪圖より作製

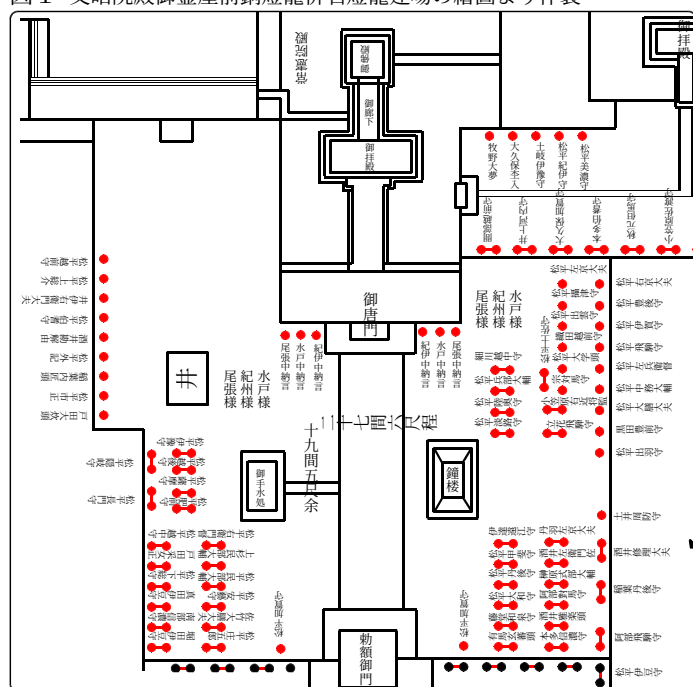


図2 『東叡山御燈籠建場図』より作製の図

所沢市教育委員会によって待望の『狭山山不動寺所在銅燈籠調査報告書』が刊行された。2年前の暑い夏の日差しの中で、ご苦労されたお話を聞いているだけに受け取った時の感動も一入であり、また極めて緻密な報告がなされていることに驚くばかりであった。

ところで狭山不動寺の銅燈籠の報告としてはその通りであっても、原位置の増上寺との繋がりが今ひとつ明確でなく、ただ燈籠の素晴らしさに圧倒されて了う事への不満が残った。

そこで、今回もまた少し順番を無視して北霊廟、特に文昭院霊廟の銅燈籠の風景を追ってみたい。

まず燈籠の配置である。実は3年ほど前神田の古書店の目録に『増上寺 文昭院殿御霊屋前御銅燈籠併石燈籠建場の繪圖』が写真入りで出品されていた。残念ながら購入できる金額ではないので、不鮮明な写真を睨みながら配置を特定する作業を続けてきた。

判明した燈籠の総数は367基、内訳は以下の通りである。

石燈籠	1基献納大名	150名	150基
	2基献納大名	40名	80基
銅燈籠	1基献納大名	27名	27基
	2基献納大名	55名	110基
			計367基

銅燈籠の基数は137基、『戦災等による焼失文化財』の中の文昭院の焼失状況の項には「なお附指定を受けていた銅燈籠百三十八基のうち九十八基は焼失をまぬかれていたが、昭和三十二年移転によって原位置を離れることになったので、指定解除された。」とあるので、ほぼ合致する。

私は前に『増上寺石燈籠群の考察』（東村山市史研究第13号）の中で

「各將軍の霊廟に寄進された燈籠の総数を算出してみると、10万石以上が50藩で銅燈籠は各2基で100基、隠居大名及び10万石以下の御家門の大名の寄進した燈籠は約20基で計120基」

と予測したが、当たらずも遠からずと言うべきか。

実は古書目録の不鮮明な写真から、文昭院殿の燈籠配置が確定できたのにはもう一つ複線となる史料の存在があった。それが『東叡山御燈籠建場図』（東京国立博物館蔵）である。小平市の郷土史研究家の田中さんからご連絡を戴き特別展に出品中の絵図の存在を知り、手続きをとって特別観覧をさせていただいた。その時の調査により上野寛永寺にある常憲院徳川綱吉の霊廟に奉獻された燈籠の配置と基数が判明した。

燈籠の総数は374基、内訳は以下の通りである。

石燈籠	1基献納大名	146名	146基
	2基献納大名	44名	88基
銅燈籠	1基献納大名	28名	28基
	2基献納大名	56名	112基
			計374基

部分的な異同は有ってもほぼ正確な数字と言える。しかも綱吉の没年は宝永六年（1709年）、文昭院家宣の没年は正徳2年（1712年）であるからほぼ同じ顔ぶれの大名が燈籠を奉獻したことになる。

筆者は石燈籠－銅燈籠の燈籠配置図を元に江戸城内の控えの間による区分リストを作成してみたが、

二天門を挟んで左右に配置される燈籠配置はほぼ江戸城内での将軍と各大名の位置を正確に表していることが判った。この件に関しては機会があれば詳述してみたい。

ところで有章院御霊廟の方だが、残念ながら管見にして「御建て場図」の消息を知らない。有章院御霊廟は八代将軍徳川吉宗の布令により以後の将軍は合祀されるので、九代将軍徳川家重諡されて惇信院はこの有章院殿に合祀される。すると燈籠も有章院御霊廟内に配置されるので、当初の「御建て場図」が有っても、再配置されて以降の状態を伺うことは出来ない。このことは有徳院吉宗が合祀された後の常憲院御霊屋内の燈籠配置が、『東叡山御燈籠建場図』からは伺うことが出来ないのと同じである。

関東大地震の時に地質調査所が調べた燈籠の倒潰状況に関する資料が『関東地震調査報告書』の中にあり、そこには

所在地	種類	総数	倒落セル個数	倒落セサル個数
芝区増上寺内七代将軍霊屋	青銅燈籠	1 3 7	3 2	1 0 5
同	石燈籠	4 1 4	3 6 9	4 5
同 六代将軍霊屋	同	2 2 8	1 8 5	4 3
同 南 霊 屋	同	1 9	1 7	2
同 台 徳 院	同	5 8	5 1	7

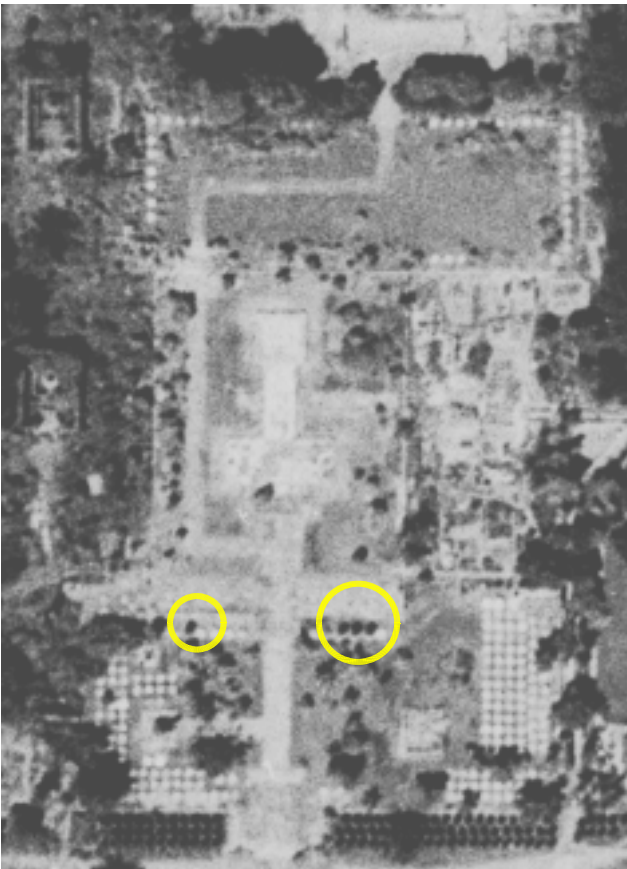


写真1 昭和22年撮影米軍航空写真



写真2 有章院拝殿前(『F.ベアト幕末日本写真集』より)

とあるのだが、七代将軍霊屋の石燈籠の数はともかく青銅燈籠の数は文昭院霊廟の物ではないかと思っている。石燈籠の数から比べて少ないのと、古写真から見る限り文昭院に倍する銅燈籠を見て取る事が出来るからだ。

また香取秀真の『江戸鋳師銘譜』には少なくとも有章院141基、惇信院109基の書き上げがあり、137基というのは頷是出来る数字とは言い難い。

もう一つ写真で確認して頂きたい。昭和22年に撮影された米軍の航空写真の有章院殿御霊廟部分を拡大した物だが、焼失した御霊屋の形を明瞭に見て頂けることと思う。整然と並んでいる白丸は焼失した銅燈籠の石の台座である。写真下の黒い丸は焼け残った石燈籠である。これを見ても水盤舎や鐘楼の廻りにびっしりと銅燈籠が並んでいたことが判る。奥院へ続く庭にも矩形に台座が並んでいるのが判る。『東叡山御燈籠建場図』に見て取れる様に拝殿から奥院への内庭には老中、京都所司代、大坂城代等の幕閣の諸大名が銅燈籠を献納しているから、2代の将軍の幕閣の諸大名と考えれば納得がいく。

『戦災等による焼失文化財』の中の有章院の焼失状況の項には「なお附指定を受けていた銅燈籠八基(文昭院八基、惇信院四基)は焼失をまぬかれていたが、昭和三十二年移転によって原位置を離れることになったので、指定解除された。」とある。数字の錯誤はこの前の文中に「附銅燈籠 八基(十二基ノ内)

(竿ニ有章院殿尊前正徳六年四月晦日ノ刻銘アルモノ三、惇信院殿尊前宝暦六年六月十二日ノ刻銘アルモノ五)」とあるから、有章院3基、惇信院5基が残されていたことが判る。

『狭山山不動寺所在銅燈籠調査報告書』には76基の燈籠が記録されているが有章院は3基、惇信院1基が報告されている

有章院は 紀州和歌山藩主の徳川宗直が1基

尾州名古屋藩主の徳川継友が2基

惇信院は 常陸水戸藩主の徳川宗翰が1基

拝殿正面左右に御三家の燈籠が各1基ずつ配されるのが基本だが、恐らく拝殿正面左側に惇信院、右側に有章院に奉献された燈籠が各2基ずつ備えられていた物と思われる。御建場図から文昭院殿拝殿前では中央階段側から水戸、紀伊、尾張の順で並んでいた

と思われるので、『狭山山不動寺所在銅燈籠調査報告書』掲載写真を拝殿前燈籠の写真と対比して掲げておく。

参考までに報告書の№を記しておけば徳川宗直が№3、徳川継友が№5、6、徳川宗翰が№4である。



写真3 有章院拝殿前『長崎大学付属図書館 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』より



写真4 左から水戸、紀伊、尾張家の所沢所在燈籠{報告書}より

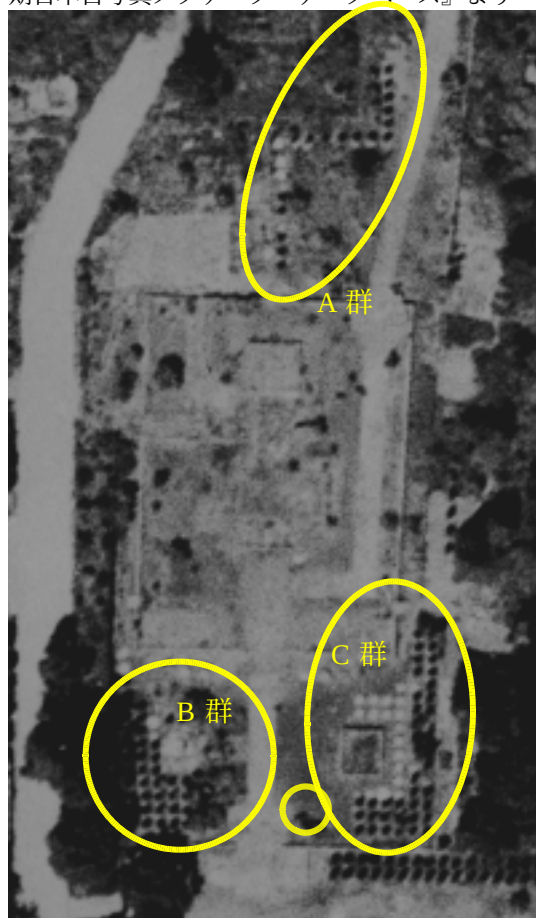


写真5 昭和22年撮影米軍航空写真



写真6 拝殿から奥院への仕切門『東京国立博物館所蔵 幕末明治期写真資料目録1』

さていよいよ文昭院殿御霊廟の燈籠配置である。同じく昭和22年撮影の米軍航空写真を見てみよう。

拝殿前の御三家の燈籠はここでは総て焼失してしまったが、勅額門を入った内側左右の燈籠群と鐘楼裏側の燈籠が焼け残っているのが分かる。

まず A 群である。拝殿から奥院へ続く内庭部分で、奥院側から

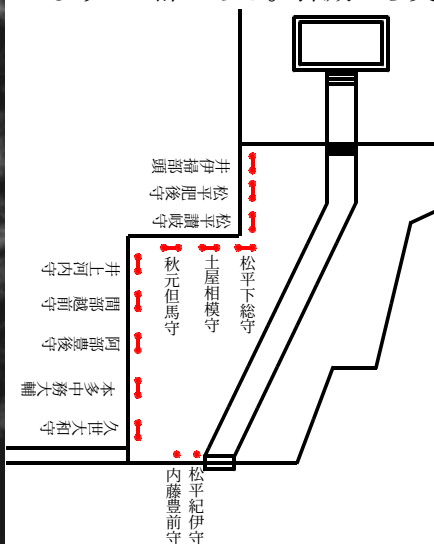


図3 図1の拡大図

仕切門とするのが正しい。

- 久世大和守 2基
- 本多中務大輔 2基
- 阿部豊後守 2基
- 間部越前守 2基
- 井上河内守 2基

この列で4～5基残っている様に見えるが、報告書には阿部豊後守正喬№23,24だけが報告されている。

- 秋元但馬守 2基
- 土屋相模守 2基
- 松平下総守 2基

写真では6基とも焼け残っている様に見えるが、報告書には秋元但馬守喬知が1基№38、土屋相模守政直が1基№34、松平下総守忠雅が1基№33のみが記録されている。

写真8には6基が配置されて写されている。右手に見えるのが奥院へ向かう石段、その奥に鑄抜門現在の増上寺徳川家墓所正面に残されている門が有った。

一番奥院に向かったの列が

- 松平讃岐守 2基
- 松平肥後守 2基
- 井伊掃部頭 2基



写真7 奥院から拝殿を望む(彩色絵葉書 筆者蔵)



写真8『長崎大学付属図書館 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』より



写真9 文昭院勅額門内 『F.ベアト幕末日本写真集』

で、写真5にも6基残っているのがはっきりと見える。報告書では

松平讃岐守頼豊が№ 19,20、松平肥後守正容が№ 39、井伊掃部頭直該が№ 53,75 に報告されている。

この6基は彩色絵葉書の写真7に綺麗に写し出されているので掲げておく。

次にB群とC群の間、勅額門に一番近い部分に在った燈籠について見てみよう。

少し小さいが図2の『東叡山御燈籠建場図』の図の勅額門の左右を見て頂きたい。左右各1基ずつ奉献された銅燈籠には松平加賀守と記されている。図1の『増上寺 文昭院殿御霊屋前銅燈籠併石燈籠建場の繪圖』でも勅額門の左右に1基ずつ燈籠が配されていて、写真からは判読しづらかったが「松平加賀守」と読んでおいた。松平加賀守つまり加賀100万石の前田家としてはまず順当な位置を占めていると考えられる。

写真9は勅額門を内側から見た写真で、写っているのが前田家の燈籠である。報告書では9, 10に報告されている。

航空写真からは勅額門正面左手の燈籠の有無は判然としなかったが、左右共に無事に残されていたことになる。

さてB群の燈籠である。実は古書店の写真はこの辺りが不鮮明でほとんど名前を判読することが出来ない。

今度は報告書の中の特殊な意匠の燈籠を古写真の中に見出すことが出来ないか考えてみた。特殊な意匠と言っても、細かい部分での判別は難しいので、大まかな特徴は無いかと報告書の写真を見比べていたら、7, 8の仙台藩主伊達陸奥守吉村が目についた。



写真10 左松平加賀守燈籠2基、右伊達陸奥守燈籠2基(「報告書」より)

写真10 右側の写真だが竿の部分の縦の襷のようなはっきりとした装飾(石塚氏より「額縁」と言うのだとご教示を頂きました。)が他の灯籠との違いを際立たせている。

古写真の中にこの特徴を持った燈籠が写し出されている物があつた。水盤舎周辺を写した物で、写真11、その拡大写真12で明瞭に見て取ることが出来ると思う。ところでこの写真、水盤舎右手に並んだ2基とその奥にもう1基同じ特徴を持った燈籠が写っている。報告書から鋳物師は法橋橘姓大西定林延貞と分かる。これを香取秀真の『江戸鋳師銘譜』によって調べると大西定林橘延貞 法橋の項に

◎ 芝増上寺文昭院殿霊廟銅燈臺両基 土浦城主土屋政直献納

正徳二年壬辰十月十四日〔一七一二〕御鋳物師法橋大西定林作

◎ 同上 一基 藤原朝臣綱村献納 同上年月日 冶工法橋橘姓大西定林延貞作

◎ 同上 両基 陸奥守藤原朝臣吉村献納 同上

◎ 同上 羽州山形城主堀田氏紀正虎献納 同上



写真 13 文昭院鐘楼 『幕末明治期写真資料目録 1』より



写真 12 写真 11 の拡大写真



写真 11 文昭院水盤舎 『幕末明治期写真資料目録 1』より



写真 14 大磯吉田茂邸内七賢堂前の燈籠

とあって、同じ鋳物師が文昭院殿の 7 基の燈籠を製作していることがわかった。

この中で堀田伊豆守正虎の基数の記述がないが、常憲院には 2 基献納しているのでここでも 2 基していると考えて間違い無い。となると 1 基献納しているのは藤原朝臣綱村つまり隠居して上総介となった伊達綱村である。

伊達家が同じ意匠で 3 基献納していると考えるのが一番無理の無い推測と言える。

ここまではほぼ同定しうるが、後の燈籠にはこの 3 基程の決め手となる特徴が無い。つまり似たり寄ったりなのである。私的には別の写真に見える水盤舎左手手前の 2 基の燈籠は備前岡山藩主池田伊予守綱政のものだと推定しているが、文昭院殿燈籠の御建場図の存在がはっきりしている以上、これ以上の推測を重ねても余り意味が無いものと思われる。

C 群の燈籠については、写真 13 で見て頂ける様に、写真から特徴を割り出して同定していくことは無理なので、在りし日の増上寺文昭院殿靈廟勅額門内の燈籠の有る風景としてお目に留めておいて頂ければ、所沢狭山山不動寺所在の銅燈籠の原風景が自然と理解して頂ける物と思う。

増上寺から所沢には 80 基銅燈籠が移されたが、今回報告書が確認できたのは 76 基である。

内 1 基は大磯の吉田茂邸内の七賢堂前に置かれている。

上野国吉井藩主の松平（鷹司）越前守信清が文昭院に奉献した燈籠である。地元のガイドボランティアは吉田茂と西武の堤康次郎との親交により寄贈を受けたとの説明をされたが、昭和 46 年刊行の『高輪美術館蔵品目録』の中には所沢市ユネスコ村と所在地が記されており、残念ながら吉田茂の生前にこの燈籠が移されていたとは考えられない。おそらく昭和 44 年に西武が管理をするようになって以降に所沢から移された物と考えられる。

他にも 1 基『高輪美術館蔵品目録』に名前があって、今回の報告書によって所在の確認できなかった灯籠



写真 15 七賢堂前の燈籠

が有るが、或いはどこか西武系の施設に移されているのかも知れない。

少し足早に増上寺北靈廟の銅燈籠の風景を紹介してみたが、報告書を元に幾らかでも燈籠の原風景を読み解く切っ掛けとなれば幸いである。

なお、文中に所沢市教育委員会の『狭山山不動寺所在銅燈籠調査報告書』から燈籠の写真を使用させて戴いた。記して撮影された石塚氏及び教育委員会に御礼を申し上げます。

また、色々の批判はあってもこれだけの銅燈籠が今日纏まって所沢に保存されているのも、西武鉄道の努力の賜物と考えている。昭和32年、まだまだ文化財保護どころではなかった時代に、ホテル建設の為とはいえ荒廃した増上寺の寺地から所沢に移し、記録し保存を続けた功績は今に多としなければならない。

国の事業という名を借りて、どれだけ多くの文化財が失われて了ったか、近くは武蔵国分寺と国分尼寺が調査もされずに武蔵野西線で分断されて了ったことを見れば瞭然である。今の水準で、一企業に国の貧困な文化財保護政策のツケを回すのは酷な気がする。

所沢に残された増上寺の風景を何時までも大切に保存して頂きたいと思う。